

口頭発表「日常の自然活動や飼育活動を通して 環境教育のあり方について考える」

佐々昌樹



1 主題設定の理由

現代社会において幼児を取り巻く状況は、自然や遊び場の減少、ビデオやテレビゲームの普及による遊びの変化により、自然体験が大幅に減少している。また、住宅事情により、家庭で動物の飼育をすることもなかなかできなくなっているのが実情である。こうした、幼児の自然や飼育の実体験の不足を、具体的にどのようにして補えばよいのだろうか。そのための環境設定の工夫と、幼児の活動への援助について考え、それを実践することとした。

2 研究方法

(1) 自然環境の再認識

園内外の自然環境を調査して「自然地図」を作り、子どもを取り巻く自然を再認識し、その指導上の有用性を検討する。

(2) 自然環境の工夫

豊かな自然体験ができるような環境を、子どもと一緒に作ってみる。そして日常の保育の中で子どもと自然との関わりに意識して目を向け、子どものつぶやき、行動等を記録するように、記録の仕方を考えてみる。

(3) 自然環境の活用

園内外の環境をどのように保育に生かせるか考える。特に生き物との関わりについて子ども達にとって印象的な体験になるような保育を考えてみる。

(4) 自然の活動から環境教育へ

これまでの活動を通して得られた様々な成果を再確認し、幼児教育の中での環境教育のあり方について考え、これから園庭

の自然作りや自然の遊びについて検討する。

(5) 飼育動物の世話をし、触れ合う機会を多くする。

3 3歳児（子ども達の様子と自然との関わり・小動物との関わりについて）

最初は幼稚園にいるウサギやアヒルに餌をあげるといった触れ合いから始まった。部屋では、幼稚園にある池からオタマジャクシをとめて飼育し、カエルになる過程を観察した。梅雨の時期には、子ども達が園庭で見つけたカタツムリを飼った。

梅雨が明けると、園庭にはセミ・トンボ・チョウ・バッタなど多くの虫が見られるようになった。子ども達はこれらをきっかけに、園庭での自然の様子に興味・関心を持つようになる。自分で進んで虫を探したり、「見つけたよ！」という声を聞くとそこに駆け寄って見ようする姿があった。しかし、そこから先の虫との関わりには個々に差が見られるようになる。興味はあるけれど、虫に触ることのできない子がいたり、3歳児によく見られる行動であるが、触ることはできるけれど虫を握りつぶしたり、踏みつぶしてしまう子どももいて、虫を生き物としてとらえている子どももいれば、遊び道具としてとらえている子どももいた。

2学期になり、4歳・5歳児が虫取り網で虫を追いかけたり、捕まえたりする様子を見てさらに興味を持ち、自分でやってみようとした。セミのぬけがらにも興味を持ち、探してみたり、触ってみたり、何のぬけがらなのか園長に聞きに来る子どもも出てきた。

このような関わりを通じても、まだ小動物が怖いからと持つことのできない子どももいる。しかし、さまざまな小動物を部屋で飼うことを通じて、より身近に生き物を感じられるようになってきた。一学期に見られた、虫を握りつぶしたり、踏みつぶしてしまう子、遊び道具のように扱う子も自然と少くなり、この頃から少しづつ小動物を大切にするという気持ちが出てきたよ

うに思われる。

《「植物」との関わりについて》

4～5月は泰山木の葉や牡丹の花びらを拾って集め、木の葉のお皿に砂のケーキを乗せて、花びらをイチゴやチョコレートに見立て、小枝のろうそくでバースデイケーキを作ったりして遊んでいた。そこからだんだんと集めたものを工夫して遊ぶようになり、この頃から帽子に大きな木の葉を貼り付け、ウサギに変身するなどの模倣遊びが多く見られるようになる。梅雨の時期に入ると絵本で見たあじさいの花に興味を示し、園庭のどこに咲いているのか探す姿が見られた。畑ではナス・ピーマン・キュウリ・カボチャ・トマトといった夏野菜の実が少しずつ大きくなっていく様子に気づき、発見することに喜びを感じている様子が見られたが、一方、小さく実り始めた段階で実を摘み取ってしまう子どももいた。

4歳児（小動物・植物と子ども達との関わりについて）

園での自然との関わりも二年目を迎える4歳児は、入園当初から植物・小動物に興味を示している子どもが多く、最近では今までよりも細かいところまで気が付くようになり、発見したもの、気づいたことなどを教師によく報告してくるようになってきた。

3歳児の時はテントウムシを見つけても「虫がいる」という報告だけだったのが、今年は「テントウムシは何を食べるのか?」、「ほしの数が違うのがいる」ということなどに疑問を持ち、何故なのか教師に質問をしたり、教師が図鑑で調べている様子を見て、子ども達も進んで図鑑を見て調べる探究心が芽生えてきた。また、自由遊びのときに印象に残った植物を自由画帳に描くようにもなる。そこで自然や虫などに興味関心がない子たちへのアプローチにもなると考え、子どもの「発見したものをみんなに知らせたい」という気持ちを受け、描いたものを切り抜き、自然マップに貼り付けていくことにする。作成していく過程で、また、観察を通して子ども達の自然を使った作品や遊びが変化し始めている。以前は頭に落ち葉の耳を付けて、ウサギに変身したり、大きな落ち葉を使ってままごと遊びのお皿にする等といったように、遊びのイメージが固定されていたが、頭だけではなく、体のほかの部分に貼り付けて、鳥

のように飛ぶ真似をしてみたり、枝に落ち葉をたくさん刺し、焼き鳥屋さんごっこをしてみたりと、自然物を使っての遊びが、展開されていくようになった。

《育てて食べること》

～春夏にかけて～

季節に合わせた野菜や果物・稻等を育て子ども達と観察をした。

4月の始めに、サクランボの実が膨らみ色付き始め、子ども達は、「いつ食べられるのか?」と毎日楽しみにしていた。実が色付き始めると、カラスが実をついぱみ自分達の分が無くなってしまうのではないかと心配し怒る子もいた。まだ緑色の実が落ちていると拾い集め、早く赤くなるようとお日様に当てて期待を膨らませていた。実際に収穫し、お昼にいただいた時には大喜びで「甘いね」「渋い」「家では食べないけど、幼稚園のサクランボは甘いから食べるんだ」と言う子もども見られた。また、「鞄にしまって持って帰っていいですか?」と言う子どももあり、家人にも見せてあげたいという気持ちが伝わってきた。ユスマラウメが実りいただいたところ、「サクランボよりも真っ赤だね」「サクランボよりも小さくて、甘くないけどおいしいね」と、サクランボの味を思い出し、どう違うのかを細かく説明する子どももいた。

5月には、5歳児のジャガイモの種芋植えを見学し、その生長を観察する。芽が伸び始めると、どのくらい大きくなったのか自分の背と比べては生長を喜び、ジャガイモの葉について青虫に興味を示す子どもや、花の色や形に気づく子どももいた。生長を追っていくことで、普段スーパー八百屋で売っているジャガイモが、どのように生長しているのかを知ることが出来たようだ。

～秋冬にかけて～

9月には、6月に植えた稻を収穫した。稻穂を触った子ども達からは「フワフワしていると思ったのにチクチクして痛い」という感想があった。小さな苗から生長を見続けた田んぼでは、トンボが卵を産みに来る様子を見たり、バッタを捕まえた思い出もある。収穫後の田んぼは、水が乾き、虫もおらず寂しさを感じた子もいたようで「何も無くなっちゃったね」という子どももいた。収穫した稻は、一粒一粒子ども達の手で稻穂から取った。始めは喜んで取つ

ていたが、しばらくすると飽きてしまう子が多く、お米を育て、食べるまでの間に色々な過程と手間があることを身をもって体験出来たのではないか。

11月には、園庭の柿を収穫し、昼食時に二種類の柿を食べてみた。食べられないという子が数人いたが、友だちがおいしいと言っている様子を見て興味を持ち、食べてみると「柿って甘いんだね。おいしい」と喜んで食べていた。

また、6月に植えた落花生もこの時期に頂いた。植える時にピーナッツを植えたはずなのに、収穫した花茎には見たことのない形の物がついており、「ピーナッツじゃないよ」と言っている子どももいた。実際に殻を剥いて中身を見せると見慣れたものが出てきて「あーよかった」と安心していた。

12月には、9月に種蒔きをしたダイコンとカブを収穫し、味噌汁にし食べた。実際にダイコンを触ってみると葉の多さに驚く子や、葉が「チクチクして痛い」という子どももいた。普段野菜が苦手な子もおかわりをし、進んでいただく事ができた。食べている時に、「皆でとったからおいしいんだよ」「太陽がおいしくしてくれたんだよ」「野菜が生きているからおいしいんだよ」という感想があった。

このような事から、種・苗の状態から水をやり観察していくことで、生長の過程を知ることができ、実った時の喜びや感動も大きく、子ども達の興味も深まってきていくように思う。また、収穫し食べる機会を設けることで、苦手なものでも食べてみようとする意欲が湧いた子もいたので、今後、自然に関わる活動と食との関係をさらに深め、子ども達の意識がどのように変わっていくのか着目ていきたいと思う。

《カマキリの観察から学んだいのちの大切さ》

10月にオオカマキリを砂場で見つけ、部屋で飼い始めた。カマキリが何を食べるのか図鑑で調べ、虫取り網でシジミチョウを捕まえて与え、その餌を食べる様子に、「食べてるよ」「すごいね」と驚いて見入る子どももいた。また、園庭で見つけたコカマキリをオオカマキリの友だちが出来たと大喜びで同じ容器に入れたところ、すぐに食べられてしまうという、衝撃的な場面に遭遇してしまった。言葉もなくびっくりして見入っていたので、このオオカマキリが、

同じ虫の仲間を生きたまま食べることについて話し合うことにした。最初は「可哀想」「いじわる」「ひどい」などの意見が出た。では、何故私たち人間は肉や魚などを食べているのか尋ねてみると、「食べないと死んじゃうから」といったような答えが返ってきた。そこで、カマキリが同じ虫の仲間を吃るのはひどくて、人間が肉や魚を吃るのはひどくないのかを尋ねてみると、子ども達は考え込み、黙ってしまった。今まで大人からの話で私たち人間は生きるためにいのちを沢山いただいているということ、いのちは大切なのだということを聞いてはいたが、実際のカマキリの生きるために食を見たことによって、人間や動物や虫に関わらず、いのちの大切さは同じことだということ、食事の前の「いただきます」の挨拶は、それらの大切ないのちを頂いているという意味が含まれていることを、少しでも感じることができた貴重な体験だったと思う。

5歳児（一年間の自然との関わりについて）

5歳児はこの一年間の自然に関わる活動のうち、ビオトープ観察、自然マップ作成、自然物を使っての作成を中心に考察する。

《ビオトープ観察》

ビオトープの観察記録をつける為に、教師が水温、気温の変化を記録することにした。ビオトープの中に水温計を、園庭に寒暖計をそれぞれ設置し、教師が毎日測定するのを子ども達が見ていたが、いつのまにか興味のある子どもは温度計の読み方を覚えて、自分で測定出来るようになった。今は気温と水温の差、例えば「今日は水の方が冷たいね」等、変化にも興味関心を示すようになってきている。目で見るだけでなく、実際に水の中に手を入れ何度だとどの位の暖かさ、冷たさかというのを確かめる子どももいた。子ども達は3歳児の頃から4歳児、5歳児の自然観察の様子を見ており、特に水温、気温の測定やビオトープ観察は5歳児にしかできない大切な仕事というイメージから、その取り組み方には最初から意欲が見られた。しかし、4~5月頃までは、ビオトープ内に生息する小動物や植物に新しいのちが生まれたり、新芽が出たり、日々の変化にクラス全員が興味を持って観察していたが、季節が変わり11月の半ば頃から、小動物が減り植物も冬枯

れとなり、目に見える変化が少なくなってくると、自然と子ども達の関心も薄れていき、結果として水中の落ち葉の腐食する様子やヤゴ、メダカ等見るのが好きな子どもと、そうしたことに興味のない子とに差が生じた。

《自然マップ作成》

自然観察の発展として、自然マップ作成に取り組んだ。最初に、模造紙に園庭の固定遊具など目印になる物を描いた園内見取り図を季節ごとに教師が用意し、そこに園庭で発見した物を子ども達自身が自由に絵を描き込んでいくという形の地図にした。5月下旬にはめだか池に咲いた睡蓮の花に興味を持った子どもが、自由遊びの際に折り紙の本から睡蓮の花の折り方を見つけて、折り始めた。折り上げた物を園庭の実物の花と見比べて、マップに載せたいと言いだし、折り紙の睡蓮を貼り付けた。そうすると、他の子どもも、目にした木の葉やモリアオガエルを折り始めマップに貼り付けるという作業が広がり、マップ全体が立体的な物になっていった。それからというもの折り紙遊びが盛んになる。今でも興味を持った自然物を折り紙で表現するという遊びは、継続して行われている。このことは予想外のうれしい展開だった。

《自然のめぐみーまとめにかえて》

子ども達は、自分達で種蒔きから肥料作り、収穫までを行った野菜やジャガイモを自分達で刻んで味噌汁やカレーライスを作って食べたり、園で実った柿やザクロ、グミを皆で頂いた。それらは常に子ども達の目に届く範囲にあるもので、生長過程を見てきている為、実際に口にした時の子どもの様子は喜びに溢れていた。普段食が細い子どもや野菜が嫌いな子も、その生長を見てきた影響からか、構えることなく自然と口に入れる子どもが多く見られた。

自然との関わりは、年間を通して、また入園から卒業するまで継続して活動を続けることが重要であり、さらに子ども達が活発に自然と関わるようになる活動の援助に努めることが重要である。加えて、自然と子どもが関わることの大切さを保護者にも理解して頂き、連絡を十分に取り合うことも大切なことである。

子ども達は、家の周りや遊びに行った公園等で見つけた植物や落ち葉、昆虫等を幼稚園に持ってくることがある。園の近くだ

けでなく、子ども達の住んでいる周辺の公園の状況も知っておくことも必要なことであろう。また、自然との関わりを今一歩踏み込んだものとなるように、園庭の落ち葉や、生ごみ、飼育動物の糞から堆肥を作り、落ち葉焚きの際にできた灰も肥料として使うことで、自然の循環を実体験するよう活動を広げて、更に自然との関わりを深めている。

6 飼育動物との活動

当園で飼育している動物は、アヒル、クジラ、ウサギ、犬、亀がいる。園の所在地は、中野区であるが、近頃、野生のハクビシンが出没するようになり、昨年9月に大事件が起こったのである。それは、戸締りが完全ではなかったアヒル小屋にハクビシンが侵入し、アヒルが殺されてしまったのである。このアヒルは、ちょうど5歳で、ダブダブという名で、人によくなついており、園児や保護者に大人気であった。園庭によく放して、子ども達に餌をもらって過ごしていた。それが思いもしない事で死んでしまったのである。子ども達には、あまりにむごい最期であったので、死んだ姿は見せられなかった。しかし、死んでしまった事実はみんなに伝え、そして、アヒル小屋の前に、ダブダブの餌入れと、周辺に落ちていた羽を籠に入れて、ダブダブを偲ぶよがとし、お墓も作った。子ども達の多くが泣いて悲しみ、保護者の中にも涙する姿があった。



卒業生の多くも、ダブダブの死を知って訪ねてきて、お墓におまいりをする姿が見られた。それから8ヶ月がたった今でも、お墓に花を供える子がいる。またアヒルを飼いたい気持ちはあったし、保護者の中には、もうアヒルは飼わないのですかという人もいたが、大事に思っていたダブダブが

死んで、すぐに代わりのアヒルをというのでは、死という事がどういうことか理解するうえで、安易に考えてはいけないことと考え、すぐには飼わなかつたのである。お店で買ったカブト虫が死んだら、「お店で直してもらつてよ」という子がいると話題になって久しいが、この感覚だけは持たないでほしいという思いからである。ダブダブの死を通して、多くのことを学ぶ機会としたかったのである。

悲しい別れから8ヶ月たち、新入園児も落ち着き、進級した子ども達の気持ちも落ち着いてきたところで、この5月に、アヒルの雛を園に迎えた。ダブダブを知っている子ども達も、アヒルの雛から飼ったため、成長してダブダブそっくりになつても、ダブダブとは違うアヒルであるという認識をもつてゐる。

モルテンとなづけられたアヒルの子は、すくすくと育ち、ダブダブの後を継いで人気者となっている。

◎犬のモモとウサギの様子

ミニチュアダックスのモモは9歳。園庭や教室に自由に出入りして、子ども達と遊んでいる。初めて犬に接する子も多く、怖がる子もいるが、徐々に慣れて、抱き方等



上手になってくる。年中・年少児の中には、モモのおなかや耳をギューッと掴んだり、引っ張ったりする子もいるが、友だちや他の子に非難されたり、モモが痛がってなく様子を見る等して、徐々にそうしたこともなくなり、大事にするようになる。ウサギは、年をとっているものの元気で、子ども達が世話をしている。餌の野菜は、各家庭で出るにんじんの皮やキャベツや白菜等の切り落とし等を持ってきて与えるようにしている。

(まこと幼稚園園長)

